



ラスト・ワン
(改)



森野イブキ

ここ、ネス湖のアークハート城を間近に控えた所に三脚を据え陣取ってから、もう六時間になる。崩れかけの古城に、もの悲しさを思う。

日没までにはまだ時間があった。ミニボトルのウイスキーを軽くあおってから、再びファインダーをのぞき込んでみる。相変わらず湖面に変化はなかった。

久々の休暇を、幻のネッシーを求めて、こんな殺風景な所で過ごしている事自体が、常識的に考えてみれば馬鹿げたように思えた。スコットランドまで来て、自分は一体何をやっているのか。そう、男はやや自虐的な気分浸っていた。

思えばあの、`世紀の大ペテン`という報道に端を発していたのだ。『外科医の写真』という、ネス湖の有名な怪物写真が完全なトリックだったと暴露され、その情報は瞬く間に世界中に配信された。結果、ネッシーはインチキというのが世間の常識となっていた。

男には正直な所、何を今更という感じだった。それ位の事は我々マニアにとってはすでに常識だったのだ。ゆえに、画一的な報道には怒りを覚えたものだった。その反動のせい、男は幻の怪物に熱中していたはるか少年時代を思い出し、その頃の情熱が次第に蘇ってくるのを感じていた。

男が想像したネッシーの正体は、中生代に生きた首長竜プレシオサウルスであった。その勇姿に想いをはせる事で、メディアに対する怒りを静めていたのだ。

再び、ファインダー越しに褐色の湖面を見つめる。心のどこかでやはり何かを期待している自分がいた。事実、男には昔の夢だった湖の怪物を目の当たりにしたい、という思いが、年月を過ぎた今になっても自分がここにいる理由なのだ。次第に少年時代のワクワク感が戻ってくるのを感じた。

湖面に影がある。視線をファインダーに集中する。音も無く、それは目の前に出現した。反射的に一度、二度とシャッターを切る。自分でも不思議なほど、冷静だった。

水面から鎌首をもたげ、背にはコブがいくつもある。その姿は、仮説の一つである、あこがれていた中生代七千万年前に生きていた首長竜プレシオサウルスに似ていた。が、しかし明らかにそれは、似て非なるものに思えた。ハ虫類特有の精悍さの欠如した頭部は、造作があいまいで、暗い灰褐色のブヨブヨとした皮膚感に覆われた姿は、不気味という他なかった。これが夢にまで見た、ネッシーの真の姿なのか。

「何なんだ、これは・・・」 思わず、絶句する。

不意に怪物と視線が重なる。

突然、金縛りにあったかのように体が硬直した。えも言えぬ恐怖が背筋を走り抜け、全身が震えあがった。何故ならその小さな灰色の瞳の奥に、紛れもない知性の光を認めたからだだった。

もし、それが酒による酩酊での幻覚でなければ、だが。その瞳は悲しみに満ちあふれていた。次第にそいつの意識が、侵食してくるのがわかった。

彼は、自信の醜さを嫌い、悲しんでいた。ゆえに我らは姿を隠していたのだ、と。そして、ここでは自分が最後の生き残りであり、いずれは終わりの時を迎えるのだ、とも。

ふと我に返ると、いつしか怪物は姿を消してしまっていた。全てが幻のように思われた。

男は少年時代からの夢であった怪物への期待と絶望、そしてこの冷たい湖に、ただ一頭だけ残ったという彼という存在の孤独を思った。何故か、自然に涙があふれ出ていた。

やがて男は、手の中の物をしばしの間、見つめていた。そしてそれを湖へと投げる。一本のフィルムが、孤を描いて着水する。小さな波紋を残し、褐色の湖水がそれを包み込んでいく。男の瞳がそれを目にしっかりと焼き付ける。

「ありがとう。そして、さようなら・・・・・・・・」

男は静かにネス湖に背を向けたのだった。

(了)